

## 胡麻郷開拓とその後継者たち

### 開拓者・中澤昌平さんに聞く

#### 胡麻の開拓者たち

戦争末期のころ、わたしはまだ子どもでしたが、両親とともに胡麻郷村で農地の開拓をしておりました。あるとき、「危険思想者」がこの村に来るぞという噂を、役場の職員をされている向かいの家の奥さんから、母が聞いてきました。それが貴司山治さんと谷口善太郎さん<sup>(1)</sup>でした。

そのとき貴司さんがお住まいになつたのが、国民学校の下の保育所のお隣りの中川さんという養鶏場やつたんですよ。戦争中で、養鶏場には餌がなかつたので、ニワトリはほとんどいなかつたんですね。その鶏舎を仕立てて、谷口善太郎さんと背中合わせに住んでおられたのを覚えています。貴司さんのところはものすごく都会的な若い奥さんがおられて、それとは対照的に、谷口さんの奥さんは本当に農婦というような雰囲気のかたでしたね。あと谷口さんご夫婦には小さな養女の子がおられましたね。

わたしの親父が養鶏場の中川さんと親しかつたので、二度三度、谷口さんと貴司さん宅を、一緒に訪ねて行つたことがあります。家をのぞいたら、本棚も何もない時代ですから、本がずっと壁にそつて一段に並んでいるん



です。たくさんの本にわたしたちはとても感心していました。貴司さん宅に中学生の息子さんがおられたことも記憶にあります。その私と同年配の方が貴兄（伊藤）でした。

谷口さんは別に近所の武内さんの離れの二階を書斎に借りて、執筆活動をされていました。その武内さんなんかも出入りされていたようですが、谷口さんは戦後すぐにマルクス・レーニン主義の研究会なんかも開いておられたと聞いています。この間も、当時、小学校のあたりのお家に行っていたことがあるよという女人から手紙をもらいました。

わたしはどうちかいうたら、社会主義者、社会党とか共産党とかのほうが好きでしたけど、そうした研究会に入ったり、活動したりということは、今日までついになかったですね。なにかちょっと勉強が少なかつたから、そういうところに行くのに劣等感を持っていたんやと思います。小学校も卒業してないんですよ。戦時中の開拓者の家は貧しかつたし、わたし自身は体も弱かつたしね。わたしが旧国民学校高等科二年生のとき、学制改革で六三三制になつて、行きたかつたら園部中学（現府立園部高校）でもう一年勉強して、さらに新制高校に行けたんですけど、その年の半分ぐらいは学校に行つて、あとは一生懸命開拓しとつて、行かずじまいでした。でも胡麻郷校で一番二番は、みんなよそから来た開拓者の子ばかりだつたんですよ。開拓の子らは勉強さしたらみんな、よくできていいい学校に行きました。

あと、貴司さんやら谷口さんは、終戦後に農民組合をつくられていますね。あのころの村の優秀な連中はみんな、谷口さんなんかのところに行つて、農民組合をつくる相談をしたりしどと聞いています。その後、農民組合も開拓農業協同組合みたいなかたちになりました。ちょうど京都府は革新府政やつたんで、当時の開拓の指導者たちは府庁を肩で風切つて歩いたといわれていました。農業協同組合が開拓に積極的に取りくんで、それが京都府中に広がつておりましたので、わたしたちもその支援を受けることができました。<sup>(2)</sup>

たとえば、このあたりは強酸性土壌でぜんぜん作物はとれないし、水かけの水もなかつたのですが、そうした

ときに雨水を貯め込むためのコンクリートの水槽を補助金でとつてきたりしていました。「炭カル」など大量に無料でいただきました。また、そのころ入植された人は満洲からの引揚者が多くて、本当に悲惨な生活を送られていたんですが、それに助けられた人もいると思います。

谷口さんのほうは、一九四九年に共産党公認で京都府第一区から衆議院に立候補されて、二度目の挑戦でみごと当選されました。当選されるとは思っていなかつたので、村じゅうみんなびっくりしていましたよ。

そのころのことなんですが、開拓地で生活するのにいちばんお金になるのがスイカでして、うちだけでトラック一台ぐらいのスイカを作つていたんですよ。すると谷口さんが、共産党の京都の事務所で売つてあげるわ、と言われたので、持つて行つたことがあります。でも、しばらくして共産党の若い連中が、売上みんな食いつぶしてしまつたんですよ。いまの若い奴はけしからん、というて谷口さんと親父が怒つっていたのを覚えてています。

ところで肝心の農地開拓のほうはといいますと、終戦前後のことですから、田舎に食料品店があるわけやなし、自分の食うものは自分で作らなかんような時代でした。うちの畑の一部を、中川さんのお世話で、貴司さんと谷口さんにお貸ししたことがありまして、貴司さん谷口さん一家が総出で作りに来られました。一回か三回くらい来られたけどそれつきりになつてしまつて、これはそう簡単には作物はできんと観念されたような感じでした。

貴司さんのところも執筆活動やらがこんなところでは無理やつたんや

るうと思ひますが、戦後しばらくしてお帰りになりました。谷口さんのほうも国會議員ですから、京都のほうへ戻られました。

その後はいろんなことがあつたけれども、同じように、インテリのかたはみんな帰りましたね。結構優秀な人がおられたんだけど、土地を買うという業者が来たときに、渡りに船やというような感じでみんな売られて、帰つてしましました。

わたしも本当はもう百姓がいやで京都に帰りたくてしようがなかつたけど、そんな道はなかつたしね。最終的には、新田という集落（胡麻・下山開拓地で最も多人数が入植した地区）でも牛飼いをして残つた人は三軒か四軒ですし、こっち（新町地区）も農業専業で生活しているのはわたし以外に三軒か四軒です。そういうことで、戦後の開拓行政は失敗したのかなと思うほどの状況です。

### 後継者たち

貴司さんのところで書生をされていた青木さんは、同じ頃にお手伝いをされていた奥さんと、そこで結ばれましたそうですね。このかたは最後までここに残つておられましたけど、途中で京都市の中央市場に勤められました。この前伊藤さんが来られたときには、奥さんが泣いて喜んではつたと聞いています。こここの家は、息子さんのほかに娘さんがたくさんありますて、家を出て働いておられたんですが、その子らに土地をやるといつたら、みんなそこに家を建てて、最終的には胡麻郷に帰つてこられました。これは違う意味での農村後継者ですね。

わたしも息子と娘がいるんですが、子どもたちに農業を継がすことができませんでした。わたし自身何の教育も受けていないので、子どもにだけは石にかじりついてでもいい教育をさしてやりたいと思いました。そうなると農業だけでは食えんわと思ひまして、いちど百姓から職業的な浮氣をして、とれたものは自分の手で売ろうと、

産地直送をはじめました。そうしたおかげで、子どもを大学なり短大なりに行かせられたんですが、そうした考えが罰が当たつて絶対百姓してくれません。それだけはいまわたし自身、気持ちとしては悲しいんですが、自分の息子がしてくれなくても、だれかがこの土地を有效地に使つて、農業をしてもらつたらいいと思つています。

京都府に新規農業就労者を受け入れますと申し入れているんですが、世間ではたくさん農業をしたいという人がいるんですね。しかし、昔、教育を受けた人がみんな挫折して帰つたという事実を知つていますし、ひとりもんは受け入れたら絶対だめだとつくづく思います。農業はシングルではできない。ダブル、夫婦じやないとできないです。シングルで来られたら、結婚相手を探すのやらなんかが大変です。それが原因で、せつかく優秀で、自分自身も燃えて農業に賭けるというて来た人が挫折するのが目に見えています。

いまわたしのところではひとり二階にあずかっております。その二階の住人は、貴司さんが以前住んでおられたところの近く、いまはパン屋さんになっていますが、その横にビニールハウスを建てて働いています。新規就労者には、京都府から最初の二年間は、営農支援資金というのを月額一〇万円くらいくれるんですよ。五年以上ここに住んだら返さなくともいいんですが、途中で挫折したら返さないといけないんです。彼もそれをもらひながら気張つてやっています。昨日なんか忙しくてくたびれましたというて、うちに報告に来ていました。一日で三万円くらいの、だいたい二日分の野菜を出荷しました。そのとき忙しいことが楽しみですわというてたんですが、欲がついてきたら、しめたもんです。

そうした若い人が四組も完全に村の人、地元の農業後継者になりました。応援しているわたしにとつては黙ります。わが人生に悔いなしです。

一〇一一年五月一五日、京都府南丹市日吉町胡麻新町（旧船井郡胡麻郷村胡麻） 中澤昌平氏宅にて

（文責・編集部）

## 注

(1) 谷口善太郎（一八九九年—一九七四年）は石川県出身、京都に出て清水焼陶工となり労働運動に投じる。三・一五弾圧以降プロレタリア作家となり「綿」「清水焼風景」などを書く。筆名加賀耿二・須井一。戦前貴司と親交あり、雑誌『文学案内』にも「血の鶴嘴」など多くの小説や記事を書いている。貴司の胡麻郷入植は谷口の勧誘による。しかし戦後は著しく不仲になつた。一九四九年いらい衆議院議員に日本共産党公認で六回当選。

(2) 一九四六年、胡麻郷開拓農民組合設立、六月の臨時総会で貴司が組合長に選出される。この頃既に全日本開拓者連盟、京都府開拓農民組合も組織されており、当時、開拓農民運動は全国的に盛り上がつていた。一九四八年には全国開拓農業協同組合も結成されている。

## 中澤昌平さんのこと

伊藤  
純

胡麻郷は、京都から日本海に向かう山陰線が丹波高原を越えていく、その分水界に広がる美しい高原地帯である。七十年近い昔、私たち一家は、この胡麻郷に疎開者兼開拓農民として三年近くをすごした。わずか三年のことだが、余りにも美しいその高原の風光は、なにやら見当違いなことに四苦八苦してすごした疎開開拓民としての記憶と併せて、深く心底に刻まれている。

ふとしたことから、その胡麻郷に、同じ頃入植し今も農業を続けられているだけでなく、蔬菜栽培で中山間地農業経営に一つの方向を見出し、後継者の育成にも成功されつある方がおられることを知つた。

それが中澤昌平さんだつた。

以前にも一度伺つてお話しを聞いたが、一昨年（二〇二一年）には、占領開拓期文化研究会の人々と、貴司が入植し農民運動をした土地の実地踏査に、ハイキングをかねて胡麻郷を散策し、再度中澤さん宅にもお邪魔して、お話をうかがつた。そのお話では、農民運動はともかく、開拓農民としては貴司は全然ものにならなかつたことがはしなくも暴露されてしまつたが、それはもう、かねてから私も思つていたことである。

中澤さんは無教会派の敬虔なクリスチヤンだが、人と時代を見る目は、なんの偏見もなく、澄んでいる。私は中澤さんのお話を信じるのである。

#### 〈中澤昌平さんの略歴〉

一九三三年、京都市生まれ。家業は米穀商。一九四三年、米屋を止めて亀岡に疎開。一九四四年、胡麻郷村に内地開拓者として入植。一九四五年、胡麻郷小学校を卒業、高等科中退。一九五一年、入信受洗。一九八五年、米作に代わつてハウス農業に活路を見出す。以後、京都府伝統野菜生産地創設事業で「壬生菜」栽培を展開。併せて新規就農者の受入農家指定を受け、後継者の受け入れ指導に尽力。はこぶね労務農園主宰、全国愛農会理事、常任理事などを歴任。著書に『愛農の灯火一隅を照らす』（社団法人愛農会、二〇〇八年）がある。

